The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高大連携により取り組む高校生に対するアカデミック・ライティング教育の実践
Author(s)	堀, 一成; 坂尻, 彰宏; 進藤, 修一 他
Citation	大阪大学高等教育研究. 2020, 8, p. 51-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75500
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学高等教育研究　8（2019），51 − 60

【教育実践レポート】

高大連携により取り組む
高校生に対するアカデミック・ライティング教育の実践

堀　一成[※1]・坂尻　彰宏[※1]・進藤　修一[※2]・柿澤　寿信[※1]・金　泓槿[※3]・田中　誠樹[※4]
竹林　祥子[※4]・大泉　幸寛[※4]・宮﨑　雄史郎[※4]

Practice of Academic Writing Education for High School Students working through collaboration between high school and university

HORI Kazunari[※1], SAKAJIRI Akihiro[※1], SHINDO Shuichi[※2], KAKIZAWA Hisanobu[※1], KIM Honggun[※3]
TANAKA Seiki[※4], TAKEBAYASHI Sachiko[※4], OHIZUMI Yukihiro[※4], MIYAZAKI Yushiro[※4]

大阪大学と京都府立鳥羽高等学校が、高大連携の取り組みとして実践した、高校生に対するアカデミック・ライティング教育の事例報告をする。高校における探究学習をより有効にするため、高校と大学が協働して必要な教材開発を行い、大学教員や大学院生が直接指導にあたった。一連の取り組みを受講した生徒には、研究に必要な事項を自覚し、研究に対する意欲が向上する、自己肯定感が向上するなどの変容がみられた。

キーワード：アカデミック・ライティング, 高大連携, スーパーグローバルハイスクール, 総合的な探究の時間, ポスター発表, プレ FD

This article examines examples of academic writing education for high school students. There have been implemented through collaboration between Osaka University and Kyoto Prefectural Toba High School. The primary purpose of this collaboration is to make the high school's "inquiry-based studies" more effective. These studies are designed to cultivate students' abilities to learn and think by themselves through proactive learning. To achieve this result, Osaka University professors developed necessary teaching materials and held classes for high school students. The students in those classes reported that they learned what was necessary for research, became more motivated, and gained more self-esteem.

Keywords：Academic Writing, collaboration between high school and university, Super Global High School, Period for Inquiry-Based Cross-Disciplinary Study, Poster Session, PreFD

1　本報告の取り組みの背景と意義

本報告には，ここで紹介する取り組みと類似する実践を計画している日本全国の大学と高校に，参考情報を提供する意義がある．

平成25（2013）年度の日本の高校入学者より学年進行

所　属：[※1]大阪大学 全学教育推進機構　[※2]大阪大学 言語文化研究科　[※3]大阪大学 高等教育・入試研究開発センター　[※4]京都府立鳥羽高等学校
Affiliation：[※1]Center for Education in Liberal Arts and Sciences, Osaka University　[※2]Graduate School of Language and Culture, Osaka University　[※3]Center for the Study of Higher Education and Global Admissions, Osaka University　[※4]Kyoto Prefectural Toba High School
連絡先：hori@celas.osaka-u.ac.jp（堀　一成）

している高等学校学習指導要領（平成21年3月）［7］では，生徒に「生きる力」を獲得させるため，「言語活動の充実」をはかることが指示されている．また，アクティブ・ラーニング型の教育活動を推進することも指示されている．

しかし，高校教員の多くは，自分自身がそのような教育を受けた経験に乏しく，また教員養成課程でそのような指導の能力を十分獲得する機会があったとはいえない状況にある．より効果的な教育を行うために，可能であれば高校外の組織と連携することが必要であり，特にアカデミック・ライティングやアクティブ・ラーニングの教育経験が豊富な大学との連携が望まれる．そのような連携事例の報告にも意義がある．

また，スーパーグローバルハイスクール（Super Global High School）［5］の制度も本報告で紹介する取り組みの背景となっている．スーパーグローバルハイスクールは，国際的に活躍できる人材（グローバル・リーダー）の育成を目指す高校のうち特徴的な取り組みを推進するものを選定し，文部科学省が指定するものである．スーパーグローバルハイスクールの指定は平成26（2014）年度から開始されている．指定された高校の取り組み期間は5年間である．グローバル・リーダー教育の手法として，探究型の学習を主とし，論理的に主張をまとめ上げ，文書を作成する・プレゼンテーションするといった，広義のアカデミック・ライティングを教育することが選ばれることが多い．指定を受けた高校は，学習機会を生徒に提供する必要があるが，その際も高校と大学が連携して取り組むことが望まれる．スーパーグローバルハイスクールの成果を指定外高校へも周知するため，事例を報告することに意義がある．

さらに，令和4（2022）年度より，新しい高等学校指導要領［8］に基づく教育が進行していく予定である．しかし，「総合的な探究の時間」については，平成31（2019）年4月より，日本全国の高校において前倒し実施するよう平成30（2018）年8月に指示がなされた．高等学校指導要領解説「総合的な探究の時間編」［9］の「第5節外部との連携の構築」（pp.155–157）には，探究教育の実施に際して高校と地域や大学が連携して当たるよう要請されている．本報告の時点で，「総合的な探究の時間」を高大連携による取り組みとして行うことは，全国において望まれていることである．その実践例を参考のために示すことには，意義がある．

本報告で紹介する鳥羽高校と大阪大学の取り組みは，探究学習の効果的な推進にあたり高校が援助を要しているという問題点に対し，大学が効果的な高大連携活動としての支援教育を行う改善活動を行った結果，一定の成果を上げることができた優れた事例となっている．

2　鳥羽高校の取り組み

2.1　鳥羽高校の取り組みの概要

鳥羽高校は，平成27（2015）年度にスーパーグローバルハイスクールに指定された．研究主題は「ソーシャル・イノベーションで挑むグローバル・リーダーの育成」であり，価値創造力・協働力・突破力・寛容力・教養力を備えたグローバル・リーダーを育成する教育システムを研究開発するものである［4］，［3］．本報告時点の令和元（2019）年度は，最終年次である5年目である．取り組みの中心となるのは，「総合的な学習の時間」（総合的な探究の時間）として位置づけられる「イノベーション探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」と称する通年のアクティブ・ラーニング型科目である．

2.2 「イノベーション探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の概要

図1に示すように，「イノベーション探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」は，総合的な学習の時間（総合的な探究の時間）として，1～3年次にそれぞれ1単位設置し，このなかでチームによる課題研究を実施している．スーパーグローバルハイスクール事業の中核として，生徒の主体的・対話的で深い学びを促し，グローバル・リーダー育成という目標達成を目指している．

まず「イノベーション探究Ⅰ」では地域再発見プログラム「京の智」と題し，遺すべき地域の価値を再発見する探究を行う．あわせて，グローバル・リーダーとして必要な課題意識を持つとともに，価値創造力・協働力・突破力・寛容力・教養力を涵養する取り組みを行う．

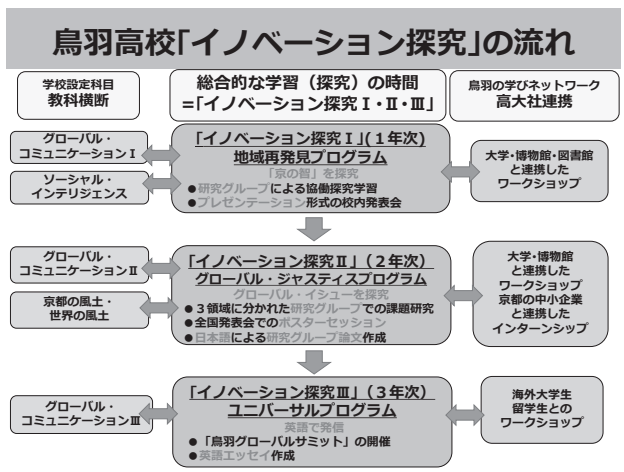

図1　イノベーション探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの流れ説明

次に「イノベーション探究Ⅱ」では，「グローバル・ジャスティスプログラム」と題し，「イノベーション探究Ⅰ」で再発見した「京の智」を土台に，異文化理解・多文化協働に基づく探究が必要であるとの認識を持ち，全地球的な課題（グローバル・イシュー）の解決に向けた仮説を持つための探究を行う．

そして最後に「イノベーション探究Ⅲ」では「イノベーション探究Ⅱ」で取り組んだ探究の成果を公表する英語論文の作成に取り組み，グローバル・イシューの解決に向けた提言発表を行う．

「イノベーション探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」で行う課題研究は，学校設定科目を中心とした教科横断的な学びや，「鳥羽の学びネットワーク」と呼ぶ高大社連携によって支えられている（図1,2）．

「鳥羽の学びネットワーク」による高大社連携

■「イノベーション探究Ⅰ」（１年）
・資料論・地域遺産論（京都文化博物館）
・フィールドワーク入門、プレゼンテーション術（福知山公立大学）
・チームビルディング（京都光華女子大学）
・文献調査レファレンス（京都府立図書館）
・課題研究宿泊研修（立命館大学BKC）

■「イノベーション探究Ⅱ」（２年）
・鳥羽高校の課題研究について（京都光華女子大学）
・ワークショップ「よい研究発表とはどのようなものか？」(大阪大学)
・フィールドワーク（国立民族学博物館）
・経営者インターンシップ（京都中小企業家同友会）
・アカデミック・ライティング講座（大阪大学）
・ポスターセッションリハーサル（大阪大学）

■「イノベーション探究Ⅲ」（３年）
・鳥羽グローバル・サミット
21ヶ国33名の海外大学生・京都で学ぶ留学生が参加（H30）
（シンガポール国立大学、復旦大学、京都府名誉友好大使、きょうと留学生ハウス等）

図２　イノベーション探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにおける高大社連携の概要説明

鳥羽高校と大阪大学の連携は，主に「イノベーション探究Ⅱ」においてなされている．節目に生徒に作成させる文書を例に説明すると，一年の流れは，4月の授業開始時から順に，「研究テーマ（仮）決定シート」→「研究計画書 Ver.1」→「調査シート」→「研究計画書 Ver.2」→「研究計画書Ver.3」→「研究ノート」となっている．それぞれの様式を（大阪大学を含むいくつかの大学との）高大連携の取り組みにより，鳥羽高校が教材開発した．そして，図3に示すように，節目の時期にワークショップや講座，リハーサルを行うという形で特別な指導を行っている．大阪大学と鳥羽高校の連携による取り組みの具体的な内容は第3節で紹介する．

「イノベーション探究Ⅱ」一年間の流れ
リサーチクエスチョンと仮説の構築に主眼

■Step1　研究テーマ（仮）決定シート
↑ 大阪大学ＷＳでの研究発表の理解
ツッコミシートでのテーマ磨き
■Step2　研究計画書Ver.1＋調査シート
↑ 大阪大学ＡＷ講座でのＲＱ磨き
■Step3　研究計画書Ver.2＝ポスター
↑ ポスターセッションでの仮説磨き
■Step4　研究計画書Ver.3＝研究ノートに向けた研究概要
■Step5　研究ノート → ３年次の英語エッセイへ

図３　イノベーション探究Ⅱの一年間の流れ説明

2.3　鳥羽高校の連携による取り組みに際しての方針

大阪大学との高大連携による取り組みをはじめとする，高大社連携を基盤に課題研究を進めるにあたり，鳥羽高校では3つの方針を立てた．

1. 高校段階では研究の型や作法の習得をめざすことに内容を限定すること．これは，内容面における深化を求めすぎて教員が過干渉となり，生徒が研究嫌いになることを避ける必要があるという判断に基づいている．また，基礎を身につけさせて大学にバトンを渡す役割に限定すべきだとの判断に基づいている．
2. 高校では個人研究ではなく，グループによるチーム研究を行うこと．これは，指導者が2人で1クラスを担当するため個人研究に対応しきれない現状もあるが，協働力をつけるためにはチーム研究が最善であるという判断に基づいている．
3. 高大社連携を推進し，その効果として生徒の探究意欲・キャリア意識を向上させること．これは，高大社連携が生徒の動機付け及び教員の指導力向上に資するという判断に基づいている．

このような方針を連携先と共有することが，外部連携には必須である．

3　大阪大学の取り組み

3.1　大阪大学の取り組みの概要

大阪大学は，鳥羽高校がスーパーグローバルハイスクールに指定された平成27（2015）年度より，鳥羽高校との高大連携の取り組みを推進している．本報告時点である令和元（2019）年度に至るまで，年度ごとに教材改良や講座実施法の改良を，鳥羽高校と協働して継続し

ている．主な取り組みは，鳥羽高校の2年生が履修する「イノベーション探究Ⅱ」の教育内容の一部を協働して行うものである．その内容は大きくわけて3点であり，生徒の探究力を向上させるワークショップの実施，アカデミック・ライティング能力を向上させるための集中講座の実施，ポスター発表に対する助言活動である．

3.2　ワークショップ「よい研究発表とはどのようなものか？」

毎年6月に，「よい研究発表とはどのようなものか？」と題するワークショップを行っている．ワークショップの目的は，以下の3項目を習得させることである．明確な研究目的を持つこと，分析的思考・論理的思考をすることを心がけること，的をしぼった調査をする意識をもつこと，である．その後の8月のアカデミック・ライティング講座をより有効なものにするため，研究の発端から最終的な発表を行うことを意識して取り掛かる必要があることと，「調査シート」を作成する際の注意事項を理解させる機能もある取り組みである．ワークショップは鳥羽高校内の教室で行われ，講師は，進藤と柿澤が務めている．高校生に突然「探究」することを指示しても，いったいなにをどうすればいいのか，最初は皆目見当がつかない状態である．そこで本ワークショップでは，柿澤を中心に作成した資料をもとに，「明確な研究目的とはどのような要件が必要か」「分析的・論理的思考とはどういうものか」「的を絞った調査とはどのように行うか」について，例を示したり，クイズ形式を取り入れたりすることにより，高校生にもわかりやすい導入セミナーになるよう，内容を工夫している．

3.3　アカデミック・ライティング講座

毎年8月の中旬に，アカデミック・ライティング講座を，大阪大学豊中キャンパス内の全学教育推進機構教室で実施している．この講座の目的は，アカデミック・ライティングの基本的技能である，受講生徒が調査した根拠情報が有効であるかを検討する能力，パラグラフ・ライティングの基本事項，を短期集中型で習得させようとするものである．講習時間は13時15分から16時15分までの3時間となっている．詳細は付録の講座タイムテーブルに記載している．

各年，受講生徒数は80名から120名程度を推移しており，3クラスに分割し，堀・坂尻・進藤が講師を務める．講座には鳥羽高校教員も同席し，進行のサポートを行う．また，詳細内容を確認するための教材として，「阪大生のためのアカデミック・ライティング入門」[2] を受講生徒全員に配布している．図4に，鳥羽高校の生徒が大阪大学で受講し，パラグラフ・ライティング作成作業をしている様子を紹介する．

この講座の進行において，大阪大学の大学院生がティーチング・アシスタント（以下TAと略記する）として補助業務を行っている．TAは，大阪大学で開講している大学院生対象アカデミック・ライティング科目「学術的文章の作法とその指導」修了者や，附属図書館ラーニング・サポーターから選抜している．彼らは，講座事前準備，講座進行時の資料配布などの業務に加え，講座中のディスカッションにおけるファシリテーター業務や，講座終了後，3時間目に受講生徒が作成したパラグラフに対し，コメント記入を行うなど，教員に準ずる役割を担っている．

図4　大阪大学での講座受講中の様子（2017年8月18日堀一成撮影）

3.4　ポスター発表指導

毎年11月中旬に，その時点までの調査・考察結果をポスターにまとめ，発表するプログラムを実施している．その事前準備として，10月中旬に，ポスターセッションのリハーサルを行っている．リハーサルと本発表の両方で，進藤と10名程度の学部生・大学院生TAが指導を担当する．TAはアカデミック・ライティング講座に参加したTAを含め，大阪大学高等教育・入試研究開発センターの高大接続部門が管理している学部学生の高大連携活動の協力者である「高大接続サポーター」から選抜している．10月のリハーサルにおいて，進藤とTAたちは生徒たちの発表を聞き，内容と発表態度の両面からルーブリック評価をするとともに，口頭での助言を行う．11月のポスターセッション（課題研究中間発表）で，リハーサルでの助言や評価の内容が反映されたポスター発表を聞き，質疑応答と講評を行う．

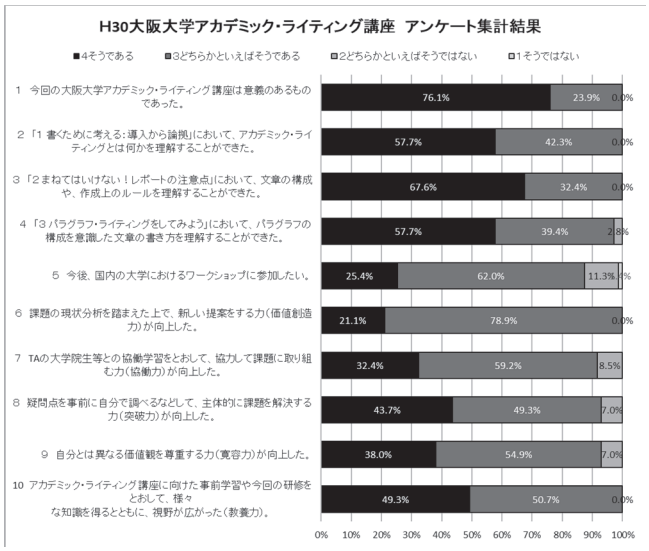

図5　アカデミック・ライティング講座受講生徒の感想

4　取り組みの成果

本節では，本報告の取り組みにおける，受講生徒の感想や担当教員が認識した受講生徒の変容について述べることで，高大連携の取り組みの成果に対する定性的な紹介を行う．

4.1　受講生徒の感想と高校教員が認識する変容

ワークショップ「よい研究発表とはどのようなものか？」における受講生徒の代表的な感想には次のようなものがある．「改めて自分たちの取り組んできたことを確認してみると，全体のテーマもそうだが，テーマを支える部分的な個々の話題（トピック）が不明瞭であることに気づきました」，「因果関係があるか，情報に信用性があるかをしっかり考え，筋道を立ててよい研究にしたいと思いました」．

このように，課題研究の本格化を前に，生徒たちが研究目的を明確にし，全体のテーマのなかで自分が担当すべき個々の研究テーマに絞り込むことの必要性や，よい研究発表の要件を理解し，課題研究を進める指針を獲得することができたことがうかがえる．鳥羽高校の課題研究では仮説構築までできることを主眼としているが，本来の研究では仮説検証が重要であることも理解できる貴重な機会となっている．

アカデミック・ライティング講座に関しては，大阪大学と協働で課題研究の諸様式を完成させた平成30年度のアンケート結果（図5）を参照する．前年度と比較すると，肯定的な回答が軒並み増えており，とりわけ講座内容を問う1～4に対する最も肯定的な回答が飛躍的に向上している（1が57.3％→76.1％，2が31.5％→57.7％，3が46.8％→67.6％，4が26.6％→57.7％）．

これは，事前学習として，課題研究において各自が担当するリサーチクエスチョンについての調査シートを完成させて主体的に講座に臨んだ結果であると考えられる．また，事前に大阪大学と鳥羽高校の担当者が十分な打合せを行い，事後には大阪大学の教員やTAがワークシートに丁寧な添削をしていることが，生徒の課題研究の深化に大変役立っていることを示している．大阪大学大学院のライティング指導者養成授業「学術的文章の作法とその指導」を修了した大学院生や，大阪大学附属図書館のラーニング・サポーターとして訓練を受けた大学院生がTAとして参加していることも，講座を充実させている要因である．

これらの取り組みを踏まえて，10月のポスターセッションリハーサルにおいて指導・助言をしているため，「大学の先生やTAに直接教えてもらうことで説得力が増した．また，課題研究や将来の研究に対する意欲がわいた」，「筋道を立てて考えたり，話したりできるようになった．また，それが楽しい」といった前向きな生徒の変容が見られる．また，「TAの方から『高校生だからこその考え方や視点があると思う』との意見をいただいて，高校生として自信をもって発信していいんだと思えた」と自己肯定感を高めている様子も伺える．

4.2　担当教員（高校側）の変容

大阪大学との連携により，多くの教員がワークショップやアカデミック・ライティング講座に参加し，様式を教材開発したことにより，自前で類似の授業を行うこと

が可能なレベルに近付いてきた.

また，高大接続改革の進行に伴い，国公立大学のAO・推薦入試（総合型選抜，学校推薦型選抜）が拡大する状況下，それらにチャレンジする生徒は大幅な増加傾向にある．背景には，課題研究を実施したことでAO・推薦入試に対する前向きなマインドセットが醸成されたことがある.

この状況を踏まえて，教員側では，従来行ってきたAO・推薦入試指導を総合的に見直している．主体的な課題研究を教育活動の中にきちんと位置付け，総合的な学習の時間（総合的な探究の時間）にアカデミック・ライティングの技能習得を入れ込むことを目指している．このように，カリキュラム・マネジメントにおいても大阪大学との連携・協働が大きな力となっている.

4.3　担当教員（大学側）の変容

大学側教員として，高大接続の取り組みを通じ，得られた知見とそれに伴う変容の説明を行う.

まず，大学の学部初年次生が，入学前にどのようなアカデミック・ライティング能力を保持しているか大学教員側が把握することにつながっている．これは，高校側のアカデミック・ライティング教育活動に大学教員自らも参画することで得られた知見である.

また，これらの知見は，大学の学部初年次生に対するアカデミック・ライティング教育の内容向上に活かすことができる．堀・坂尻は令和元（2019）年度秋冬学期に担当する学部初年次生向けや大学院生向けのセミナー授業において，ここで得られた知見を受講者に紹介するとともに，昨年度までの教材に改良を加える計画をしている.

さらに，活動を通じて，高大接続の取り組みをより深めていく意欲が高まった．協働して教材開発や授業設計を行うことで，高校側・大学側双方の信頼関係が構築できた．また，大学教員側が高校側の事情も把握し，高校段階で何をどれだけ指導すべきか，その指導のために高校側に大学側がどのような貢献ができるか，見通しがつけられるようになった．このような環境が整ったことで，より積極的に大学教員側が高大接続事業に取り組むことができるようになってきた.

4.4　大学院生TAに対するプレFD機会の提供

本報告の取り組みにおいて，3.3 や 3.4 で述べたように，大阪大学の大学院生は TA としてグループワークのファシリテーター，ライティング成果物へのコメント記入，ポスター内容の改良提案などの教育的業務を行っている．このことは，将来教育職に就く可能性が高い大学院生に対し，就職前に教育経験を持つ機会（プレ FD）の提供ができたことになる．アカデミック・ライティングを指導できる人材の育成については，文献［1］に詳細な情報が記載されている.

4.5　取り組みに対する外部の評価

平成 29（2017）年に行われた文部科学省のスーパーグローバルハイスクール中間評価［6］においては，鳥羽高校は，「優れた取組状況であり，研究開発のねらいの達成が見込まれ，更なる発展が期待される.」という最高評価を得た4校のうちの1校となった．4校のうち，公立高校は鳥羽高校が唯一であった．とりわけ「大学と連携しアクティブ・ラーニングを軸とした活動の実施やアクティブ・ラーニングへの指導法転換が取組を支えている点も極めて高く評価」された.

5　今後の課題

今後の課題として以下の3点を挙げることができる.

まず，本報告の時点で，「イノベーション探究Ⅱ」の最終成果物である「研究ノート」や，「イノベーション探究Ⅲ」の最終成果物である「英語論文」に対し，大阪大学側が助言するなどの連携ができていない．今後の連携の拡大が必要である.

次に，本報告の実践において蓄積したアカデミック・ライティング指導に関する知見を，日本全国の高校・大学に広く活用してもらえるような仕組みを作り上げていくことが必要である.

最後に，スーパーグローバルハイスクール指定による支援が終了したのちも，高大連携による探究科目推進の実践を継続できる仕組みを作り上げていくことも必要である.

受付2019.9.30／受理2020.1.10

謝辞

本報告の実践に際して，京都府立鳥羽高等学校，京都府教育委員会，大阪大学の全学教育推進機構および高等教育・入試研究開発センターの関係各位にお世話になりました．あつくお礼申し上げます.

本報告の実践には，JSPS 科研費 16K01016（代表者：堀一成）の補助を受け，推進した研究の成果が活用されています.

参考文献

[1] 堀一成. ライティングを支援できる人材の育成. 村岡貴子, 鎌田美千子, 仁科喜久子（編）, 大学と社会をつなぐライティング教育, pp. 157–175. くろしお出版, 2018.

[2] 堀一成, 坂尻彰宏. 阪大生のためのアカデミック・ライティング入門 第 4 版. 大阪大学 全学教育推進機構, 2019. http://hdl.han-dle.net/11094/71454 から自由に PDF ファイルをダウンロードできる.

[3] 京都府立鳥羽高等学校. スーパーグローバルハイスクール研究報告書<第 4 年次>, 2019.

[4] 京都府立鳥羽高等学校. スーパーグローバルハイスクール<第 4 年次>「イノベーション探究」実践報告書, 2019.

[5] 文部科学省, 筑波大学, 筑波大学附属学校教育局. スーパーグローバルハイスクール. https//www.sghc.jp/. 参照日 2019 年 9 月 30 日.

[6] 文部科学省. スーパーグローバルハイスクール（平成 27 年度指定）の中間評価について. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/09/1396726.htm. 参照日 2019 年 9 月 30 日.

[7] 文部科学省. 高等学校学習指導要領 平成 21 年 3 月告示. 東山書房, 2011.

[8] 文部科学省. 高等学校学習指導要領 平成 30 年 3 月告示. 東山書房, 2018.

[9] 文部科学省. 高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 総合的な探究の時間編. 学校図書, 2019.

附録データ１

令和元年度　イノベーション探究Ⅱ　大阪大学アカデミック・ライティング講座「調査シート」

研究グループ	―

組	番	氏名

作成月日	令和元年	月	日

０．最初の研究テーマ＝主題（Subject area）

２．当初のリサーチクエスチョン（RQ）＝トピック（Topic）を疑問文にしたもの

３．RQ（　　）←自分が担当するもの

調査結果１（出典も明記すること）

調査結果２（出典も明記すること）

調査結果３（出典も明記すること）

自分が調査した結果をふまえた、自分が担当するRQに対しての暫定的な答え・・・可能な限り書く

(C) 2019　坂尻彰宏・堀一成・大阪大学、京都府立鳥羽高等学校

図６　「イノベーション探究Ⅱ」夏休み作業用「調査シート」

附録データ２

時刻	講座内容
13時15分	[1時間目] 書くために考える：導入～論拠の検証（計50分） 挨拶、概要説明（5分） 批判的に考えるとは？ポイントの説明（15分） ペア作り、アイスブレーク作業（5分） 理由（論拠）の検討、ペアワーク（15分） 理由（論拠）の検討、グループワーク（10分）
14時05分	休憩（10分）
14時15分	[2時間目] まねてはいけない！：レポートの注意点（計50分） レポート作成の注意点の説明（10分） 大阪大学が作成したダメレポート例を読む（5分） ダメレポートの良くない点を書き出すグループワーク（10分） 書き出した結果の教室内情報共有（15分） ダメレポートの良くない点を教員が解説（10分）
15時05分	休憩（10分）
15時15分	[3時間目] パラグラフ・ライティング（計60分） 各自調査結果の「問い」と「答え」を書き出す（5分） トピックセンテンスを書き出す（5分） 書けたトピックセンテンスをグループで相互評価（5分） パラグラフの作成（15分） 書けたパラグラフをグループで相互評価（10分） まとめと挨拶
16時15分	講座終了

図７ 「イノベーション探究Ⅱ」アカデミック・ライティング講座のタイムテーブル

平成30年度　イノベーション探究Ⅱ　ポスターセッション評価票

評価者	
研究グループ	―

平成30年11月15日（木）

		発見力	分析力・調査力		表現力・協働力	
		研究の動機・問題の背景	リサーチクエスチョン（RQ）	現時点での仮説	最終的な研究テーマ	発表と質疑応答
	関連するポスターの項目番号	1	2→3→4	5	7	全般
評価基準	A：完璧（Great）	現状を十分に理解し、グローバルな視点で多角的に研究を進めようとしている。	研究テーマについて、実態を把握し、原因を分析するために、小さな問い（RQ）を立てて調査することをとおして、具体的でオリジナリティのある問い（RQ）を立てている。	「因果」あるいは「比較」を含んだオリジナリティのある仮説になっている。	問い（RQ）や答え（仮説）が明確に読み取れ、説得力がある文章になっている。	グループの全員が発表と質疑応答に参加し、質疑応答によって、参加者の知的好奇心が一層刺激されている。
	B：合格（Good）	現状を理解し、グローバルな視点で研究を進めようとしている。	研究テーマについて、実態を把握し、原因を分析するために、小さな問い（RQ）を立てて調査することをとおして、具体的な問い（RQ）を立てている。	「因果」あるいは「比較」を含んだ仮説になっている。	問い（RQ）や答え（仮説）が読み取れる文章になっている。	発表と質疑応答を、グループ内で役割分担して行うことができている。
	C：がんばろう（Needs Work）	現状の理解が不十分で、一面的な研究になっている。	小さな問い（RQ）を立てて調査することが不十分なため、研究テーマについての理解が深まっていない。	「因果」も「比較」も含まないあいまいな仮説になっている。	問い（RQ）や答え（仮説）が読み取れる文章になっていない。	発表と質疑応答における役割分担があいまいで、一部の人が行っている。
	評価記入欄 A～C				ポスターセッションでは評価しません	

よりよい研究にするための方策

図８　「イノベーション探究Ⅱ」ポスターセッション評価票